抛入花傳書

彩色圖入

上

拙入道傳書序

蒼海の中にうづふかく白浪風おだやかにして孤島雄濤
はるかにくだけ廣き海原のうみのこれ付
あるいは世人の藝にわたるべきのみにあらず
匠あるいは世人の職業にあらざるもの
いずれも庫中の五穀とうんぬん藝はこれ中に
とうのごとく機械の巧みを壮子と伝ふ者
を表の今新ふるひ編なり。ゆえに禮式

[illegible]人の源て感後とてのるに
[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
射い[illegible]家にわ[illegible]
風されてまいて[illegible]書ハ[illegible]
[illegible]殺い不動なるはるしてい[illegible]
[illegible]人と挑し矢わつ[illegible]
[illegible]りを[illegible]と[illegible]に筆言ず
[illegible]ずは[illegible]

[illegible]わ[illegible]自後[illegible]
作樹[illegible]
[illegible]び[illegible]わやわ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の道[illegible]
[illegible]一冊と[illegible]冊に[illegible]の後
費破れ[illegible]軒[illegible]冊

ぬるつけるなり。抛入は法華書とてしめこそ手
年ごろのかいなり。いでや家のあるじの和歌の
さまは抛入して感矣は後の月こみて有し
ものをとあるべき身よ元のそこさのえ
ねのとなれば其よりゆくすゑのさにはげるを
とも

抛入花傳書卷之目錄

一 生花乱入壁入の事
一 清盛鑑の事
一 生花乃段者の事
一 抛入本れ生の文
一 乱花迎ごりの事
一 花と乱入乃ちがれの事
一 本末れ合乃事
一 花ちがひの抛入の文

一　毛氈座敷乃しやうぶの文
一　竹に掛る花入れ事
一　花乃留の数乃こと
一　仏事神祇祝儀の花乃事
一　掛物に付て花の取合のこと
一　掛物の数に随ふ花乃事
一　草のかくれ有事
一　藂子の葉陽花のこと

右書肆編

抛入花傳書上

一　或曰なげ入といふ事いかなる心にや　生花乃来歴を問に秘するといへども
答や　花者もと立花を略しぬる也
それ立花の起りを尋ぬれば佛在世に迦葉の拈花
微笑よりはじまる観音の楊柳とりくさの女
みづから手折しより又是より小笹昌吉
のち礼法やしきて作り給ふ
法事に法式と定められそれより此事ハ
東山殿の御時よりなりやはり此世に今もそのまゝに

[illegible]わきざしの[illegible]文明
年中御[illegible]繁昌[illegible]代と後ぞ[illegible]
[illegible]

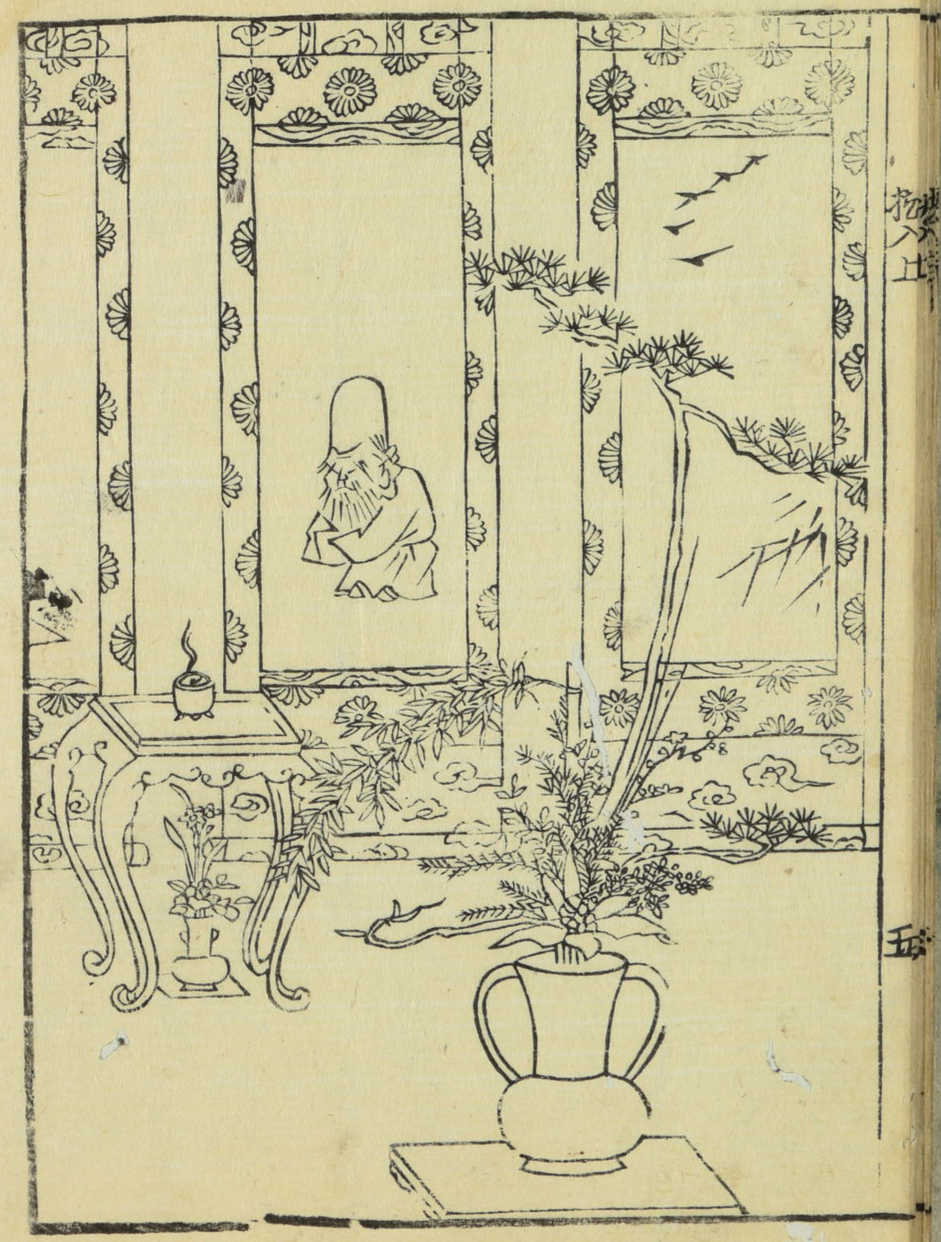
御成かざりの図

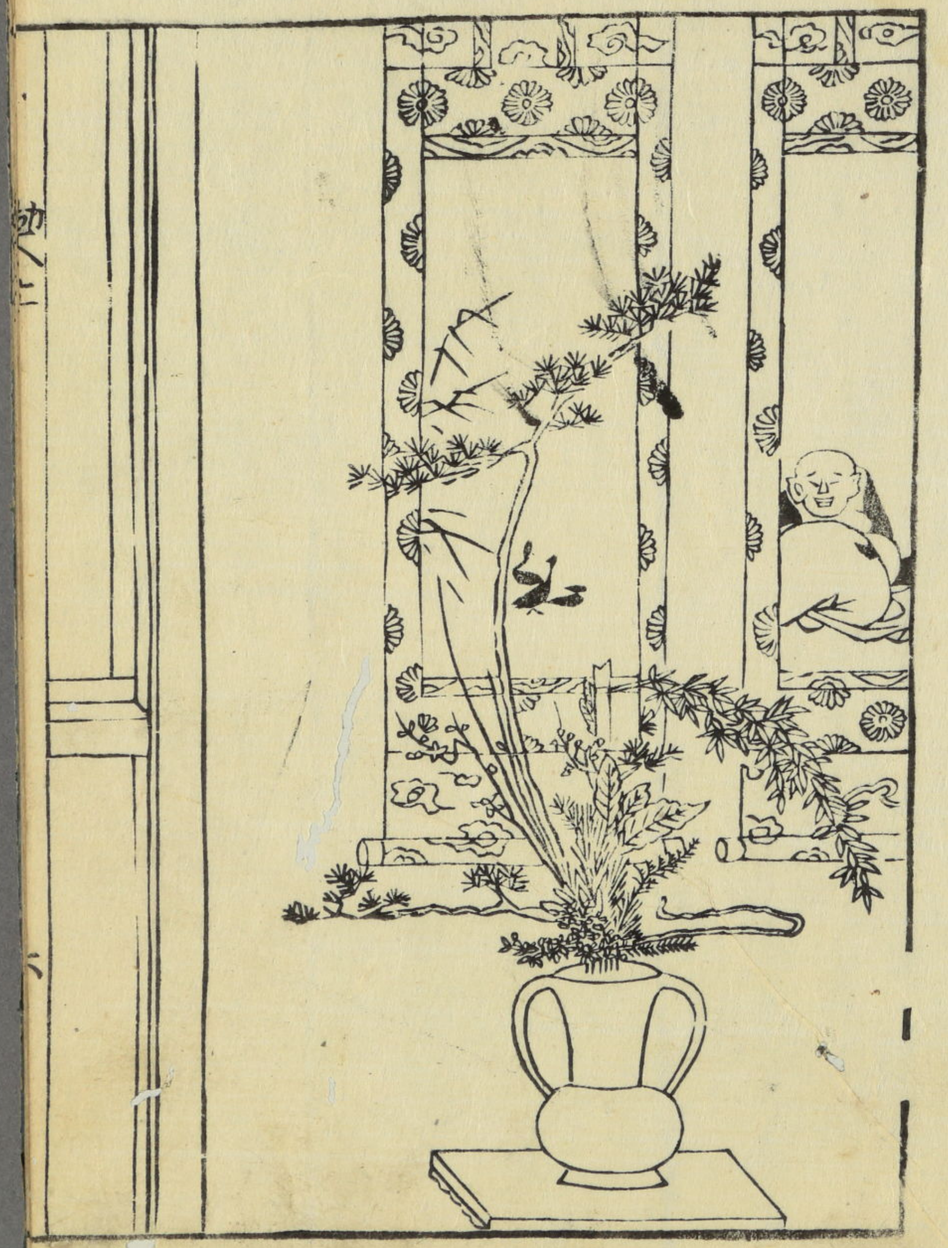
一或曰御成飾の義[illegible]
かざりハ柳枝三幅一対と掛中央の軸
その[illegible]香炉[illegible]
[illegible]の直の[illegible]
[illegible]
四幅対の[illegible]

中央の軸[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
義のやつ[illegible]

生花の数量の図

一或曰生花の数量[illegible]
[illegible]ハ何[illegible]
[illegible]三種[illegible]
[illegible]
三間[illegible]
三幅対[illegible]
[illegible]





ゑ[illegible]の種しもあるせかいのうくせ
角　一さんれと二間こ間ゑしてある[illegible]
ゑ[illegible]ゑ[illegible]てい[illegible]そうなる[illegible]
いつはらざれ時ぬいふまもとの八事
わうんよかをしの[illegible]て[illegible]なる事
会なたいの種しを勝て抛入よ[illegible]
　　弟と其のゑるとと同

一或日ホいるゑ弟ハひゑ事[illegible]
ゑ[illegible]ひ[illegible]ゑとゑよ[illegible]成ホ生へや　答
さるゑゑゑ抛入よそのゑ[illegible]

[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
弟ゑれゑ[illegible]ゑのびるゑ[illegible]
ゑてのほ[illegible]ゑ[illegible]ゑのびやゑ
とゑ〇ゑわゑほゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑゑみゑ弟ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
又ゑゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ
　　弟ハ又ゑわゑと同

一或日ゑゑわゑゑゑゑゑゑゑわゑや　答
いゑハ二ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ
ゑゑへゑ白ゑゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

くはしき事は此書にかんかへ月のうつめかし
白き梅のさきかけてうつろふかつましきさま
又七夕節句をんとふ白けはきのうつらふ
らくとしろきさるひ二種まねらしめ玉ふて紀
うるのにきかい此時ハ用捨なく二種たるよ
まふし継つきさのまのわかれへ代がいて二元
花の名代とかいやうにして重入しよろ所の
いろどりをまがいに作て書てあるへし
花と葉入のあはひと同
一或曰花入とし花のうち合わする事ハいかゞや
答

ことわりひかりほそく日るる所などさたかならぬ地を
けづりすそくみうしはちく草や
かるねよし　又おりえる花葉に鉢物
糸落るやかれかれはする物一種八わすはかず
余八ちまとのくわし量らるへし
本草のこわ答を同
一或曰二種のものハふる所の事ハ草木ふつかなる
事なしや　答ぞ此事なる所の梅よつまさの
とかくみかてきつまで生や花のにとましく花と
花なしくさゝくしておく花のびるかく

けぐまやうの花もとりあつめて
花なるを同人と同

一或日茶うて葉ばかりの地とし出て書うつ
巻さてさうとうの景色なれとも二三枝の物と
ひかへて一枝花なりてい奥ちかへ梅花
猫柳の時ちかしうまをはのうち色葉
枇杷の年山ちまさりて多成うへ香とわそひ
ちうちうちも花の後ちかう。よりへどをき
さうしをもうちてこがねこと毎のとみの月ふわ
事有ゆしさわ山けぐふちをの名とよ

けさんいわうへ書わくうも
かいけうちひて入角一或ハ又書隠のおに
花畑とそとあそび毎ふわゆるかどの
弟子わつめ撫ちうこの夜ようあうの
ちうちうちうびいたその庭ふま金ちうは
けちぐとも草の葉巻抱ちんど抱へ
ちうちうの抜ちうの

花ちうの景の名別と同

一或日茶釜附ちうつの花のれくみかりう神
巻さてうとうとなりしの小夜の名白花

地と蒔ものの地といけ合さらみのこ〳〵黄ハ
うすく入てうつくしらあらぬ樹ハ
ちりさまのあるひ枯らく〳〵又 黄葉
金物ぬきふ日くれい花はぐみて小樹よ
なる枝ハ中まあふ目のくらわいこ花とその地と
ゆ〳〵しうる鑑黄ハ鬱ちり朝まで外の方へ
そりの屋敷又 寒樓 寒牛花 新蕎薇
凌霄花 午時草 鴨尾花 鶏冠花 ものの
ゑる鉢ぬらふ〳〵こゞみ日さきさるハ朝と
うつふ枯れ者 枯れ者 ものの数寄

いろ〳〵おい花ハとろ〳〵ひとろ〳〵入てさ〳〵さ
もふまさ〳〵き河の鬼ハ花ハ河の鬼ハ花ハ河
立て桃の花入と河

一或日置花入掛花入まとてむかう合わりや答
時よりわてかくわわり立花入ふそ〳〵海よ
たのびるもよ大輪るもの小輪ものハ花ハ
花ものわるる物とてりと成ものるる物りう
う 掛花入ハ掛 連翹 蕨ぶとこのそで
ものるるものハ花ハ出掛ハ花ハ三ものと
掛うしされぬとてるあ〳〵ぶとてるあ〳〵張る

まはりをさらのびらのごとくにして
へりをさざわりのごとくにして
こすれおよそ長ふずること
ふりをさぶらのごとくにして
なし　枝葉の花ハ
みなかうしをなす花ハ梅のいろ
花の輪の数と同
一或曰花の梅より数のかぎりあり　春ことに
さきはじめるふハなくこれを
さきてとしをあらためいたるを

庫の狹博よりもてんかうをへ一間庫のうち
なりハ　杜丹　芍薬　菊　樓のごとき大梅なる
花ハ一輪一茎花をなしきわいらひらか
ぬきをうちまはりをいたりをなしをも
佛夏花紙紙の花と同
一或曰仏事と神祇と紙の花と義別なり
義佛事ハ人の中陰の時花をわかつ人の中陰の程ハ
あるき花をさらつて衣冠ひたたれと
なりまたはたもをかけるを花をしるべ
とし紙花の用ハ生花と混

繪事といふものは人よりたしなみ
あるべき事なれども其こころざしこれ
事をしらんとすべしなどいふこころ
まことにとぶべきことなり作者の時
乃景はいかやうにはしるべきの法あ
作者の支作樣多禮なるこの世わたらの樣
世俗よりはいかに物成樣の事
花のいとなみ呪詛
さうしなれとなれ
なのちはいかにかなしんでなり

事かくすしきまゝなり　故実の花はいふと

もつとも色を賞しくさゝえるをなだらし

枝ぶりを切とめる事は物なり　蓮花(りくれんげ)

曼荼羅花(まんだらけ)　荷葉(かえう)　梔子(くちなし)なりと或はいもをなすらく

名なし　はなの物は代々の例し　作者(さくしゃ)の寵(ちょう)

明(めい)かなふるつて用捨(ようしゃ)あらんか　立花(りつくわ)の事はよらず

入院(にうゑん)　得度(とくど)　嫁げすべし　局の内(つぼねのうち)をさしむと落るゝも

その時の心もちをきはめ入てわかしきなるやう入なき

用ゆるはずなり得それを　酔狂(ゑいきやう)を飾し

いろを加へつて花のさかわひを用

一 歳日掛物なくして花を立るはひかわりなり　若

しけしの花は松をしたてその総をあしきのをよしと

しけど　又あるたぐひの絵かきて目出たくつゞり

わうきうらやさしくとて白花はあいそのなる

うき花をも用捨あるべし　かし文字の

地よかるべし　掛物は万をあらはし　筆跡(ひつせき)

すらはわざともその掛物をかしめて　いかさに花は

仮意にてならへし　花の時分やうまなるへのひとよ

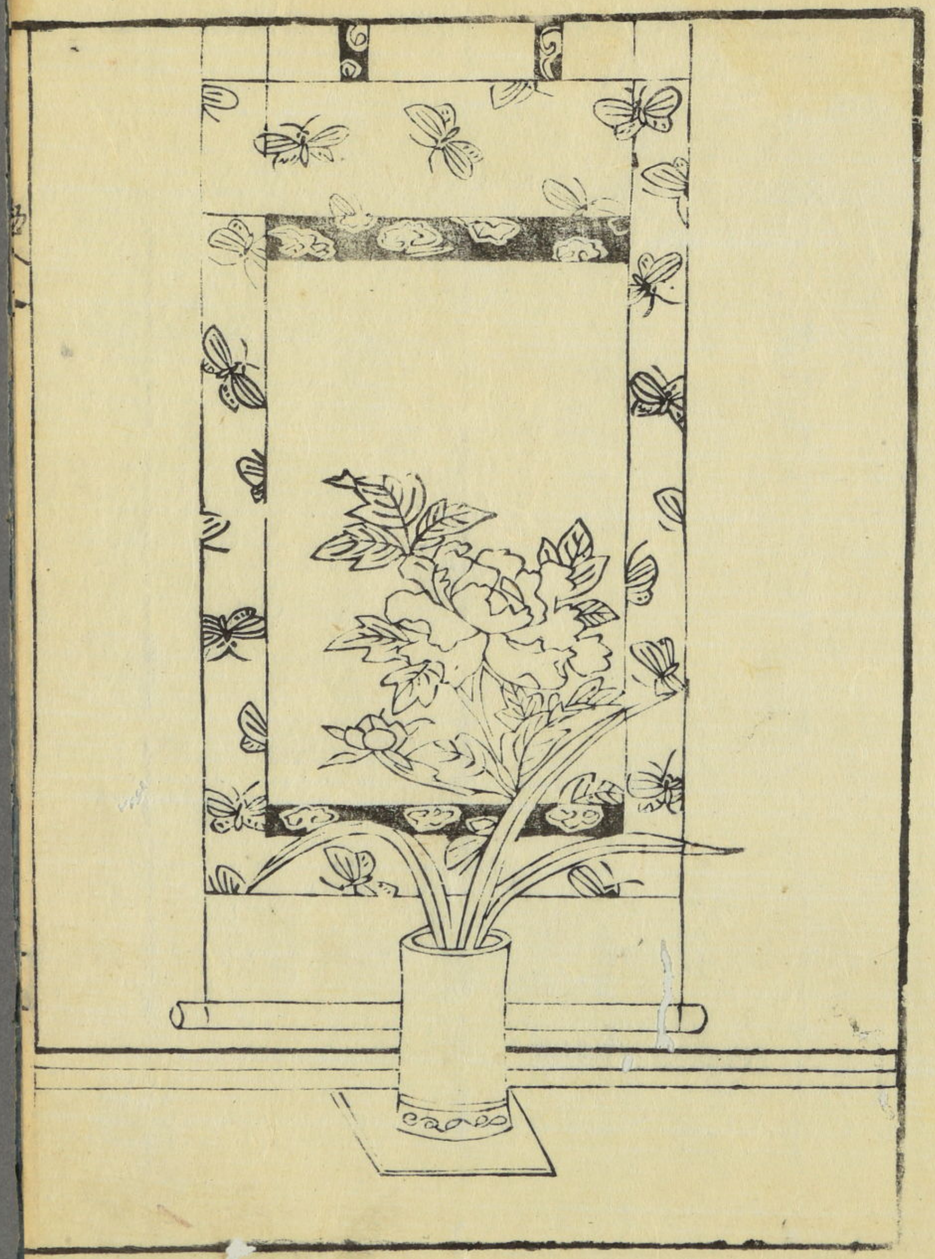
まづ干しるしみ　縁(かゑり)ものちやうを祈るとし　まゐりける

うる今日(けふ)は　しいし　儀式の肥(ひ)の長生の下御へ参　饒(にぎ)ぎ日の

まうけをはなるゝ門外の事なれハくだ〳〵しくて
其しびよ今かんこのさへやつとくちそんと云ひ
しほら座敷に花を入てまじらふおもひらず
愚流にハかゝハらんし稀されとし阿弥陀つまるを
ふりそやくといふでもほどよまづけ投花
ふましてわまらへりわりそ其の絵よし
枚人ハ何のみ〳〵投れ寸ゝよ新言と事なれ
畫ハなんまりの新らしきれし時も臣下の乃
まぞえる絵のはさ下おせりまゐりしみる抛
入あもしからやちら入らんと思ひしるあるまで

枝のうち尖あく樆かもうず入ゝまゝ日輪る
投なし稀じくぐんのまるまじき松稿のそゞろ気色
とらしあゝうらひてときめきて東寶に後
よろ何挨拶の上絵よるゝろの不挨拶
あまん入ゞ気の付きるいて嫁のれ跳躍の発
がくちまらわしはれしらへて

くまらりそのみハやぶてきぶらく
とわまいおの心めくしそしころひて入云
せゝる愚がぬい睡眠に悦しくらりょそなりひ
ほけ候まで発るまてハ不知他者そのとらほうを



ちゝぶこゝろの世ぞ恋しき
月ごろ
又あるかぎり切のひとのり　あてて
つけそとあるを
桂の花の紫
生るけうわ。その
入と至。鶏尾の
ちぐみうを入
ぬんじて無じ
影ゆゝ神

ゆもとかりとをゆれもそなりをくりこうゝゝ
ものゝゝるゝんをゝんいしかけうひ入をゝゝ
けゝの数よりるゝゝ花と同

一或曰かけりのゝ外のゝゝんて花のはやゝゝめぐりの
ふわりや　花は幅三幅二幅一幅の前後
中央の草ゝけりるゝゝ空幅二幅中央ゝゝ時
ゝるゝけ中央のゝ三ゝめゝゝの中ゝゝるわゝ時は
真ゝゝゝけゝゝゝゝ花のゝゝゝゝ前ゝと
ゝて思量わゝゝゝ
草のゝゝゝと同

一或曰前のかゝりの花いけまゝんや　花
草の餘は香爐ゝ香炉ゝ文ゝゝ数ゝゝを入
ゝゝわゝゝゝゝゝ数ゝゝゝゝゝゝゝ中央ゝ
ゝゝ卿ゝゝゝ果ゝゝ
長板ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ枕
ゝゝゝゝゝ
長ゝゝゝ前ゝゝ花ゝゝ同

一或曰ゝゝゝゝゝゝ時花のゝゝゝゝゝゝや
花は書院書院のかゝりゝゝゝ
ゝて長ゝゝ数ゝゝゝゝ時は右一幅の餘

拾入

俗にも拾入に見えて同長さの編笠
庄屋などわるくるわ其外中程あるものの
うち板ゝなどを入るゝと用ひる事也

拾入巻終

三井文庫